# 道へき・複連

発行者
北海道へき地・複式教育研究連盟
http://dohekifuku.zenhekiren.net/
委員長　柿崎秀顕
編集責任者　長谷川孝
印刷所　株式会社ビジネスサポート
岩内郡共和町南幌似39-１　TEL 0135-67-7350
題字 書家 濱谷 彩鶴（はまや さいかく）氏

## タンチョウはばたく　大地から新たなステージへ

北海道へき地・複式教育研究連盟委員長　**柿　崎　秀　顕**

『タンチョウはばたく釧路の大地から　未来を切り拓く子らに　豊かな心と確かな学力を』というスローガンのもと、第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会を９月21日・22日に開催しました。釧路管内では前回行われた第53回大会から13年ぶりの大会を加盟校が激減する中、のべ約550名の参加者を迎え、盛大に開催出来ましたことに改めて感謝申し上げます。

本釧路大会では、どちらかというと滞りがちだった分散会での話し合いをワークショップ形式で行ったり、釧路へき地複式教育研究連盟のご尽力により、地元教育大学と連携を図りながら各分科会を開催するなど、研究の輪を一層広げる実り多き研究大会とすることができました。

また本大会は、合い言葉であります「オール釧路で、へき地のよさを実感できる」「釧路で培ってきたへき地教育を全道へ発信する」「子どもの実態から出発し、子どもへ返す」という視点から多彩な教育実践が公開されました。本研究連盟が積み重ねてきた実践は、今後へき地・複式・小規模校以外の学校においても生かすことができるものだという思いと、今までとは違った視点からの示唆をいただくことで、今後の研究の一層の充実につなげたいという思いを強く感じました。

さらに本大会では、これまでにない取組として、北海道外の方々にも声をかけ、青森県や山形県、遠くは、兵庫県・長崎県からの参加があったことも大きな成果であると感じております。

へき地・複式校を取り巻く環境は厳しさを増していますが、釧路大会は、研究の成果はもちろんのこと、運営のあり方や研究を進めていく上での視点など、今後の大会のあり方に大きな示唆を与えてくれるものとなりました。

また、後志プレ大会も「自然豊かな後志から夢・希望に挑戦する子らへ　豊かな心と学び続ける力を！」の大会スローガンのもと８町村８会場で、へき地・複式の強みを生かし、子どもの変容に重点を置いた教育実践を公開し、盛会のうちに終えることができました。

これから、両大会の成果と課題を整理し、第９次長期５か年研究推進計画のまとめと第10次長期５か年研究推進計画の発展へとつなげてまいりますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

結びになりますが、両大会の開催にあたりまして北海道教育委員会をはじめ多くの教育関係機関・団体にご指導ご支援いただきましたことに心より感謝申し上げ、道へき・複連情報１６０号発行にあたってのごあいさつといたします。

# 第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会を終えて

北海道教育庁釧路教育局
局　長　鈴木　　淳

第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会が全道各地から多くの皆様をお迎えし、盛大に開催されましたことに、心からお祝いを申し上げます。

北海道へき地・複式教育研究連盟におかれましては、長年にわたり、小規模・複式の特性を生かした実践的な研究を積み重ねられ、本道におけるへき地・複式教育の充実・発展に大きな役割を果たしておられますことに心から感謝を申し上げます。

さて、本年３月に告示された新学習指導要領においては、急速に変化し、予測不可能な未来社会に生きる子どもたち一人一人が、社会の変化に主体的に関わり合い、自らの可能性を発揮し、多様な人々と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を身に付けること求められております。

そのため、各学校においては、「何を学ぶか」という教育の内容を重視しつつ、その内容をこれまで身に付けた知識や技能と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活の場面でも活用できる、生きて働く知識となることを含め、学びを通して「何ができるようになるか」を重視するなど、育成を目指す資質・能力を明確にする必要があります。

また、子どもたちに求められる資質・能力を確実に育むために、子ども一人一人や学校の実態、指導の内容に応じ「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を進めることが大切です。

このような中、本研究大会においては、「主体的・創造的に学び、豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子供の育成」を研究主題に掲げ、釧路管内の8つの学校での授業公開や研究協議を通して、小規模校の利点を生かし、学びの質を高める授業改善の在り方について協議を深められますことは、心強い限りであり、本研究大会での成果が、全道各地の学校の日常実践に生かされることを御期待申し上げます。

結びに、北海道へき地・複式教育研究連盟のますますの御発展と会員の皆様の御活躍を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会
実行委員長　今井　直史
（釧路町立知方学小学校長）

９月21・22日の２日間、全道各地および道外から、へき地・複式教育に携わる多くの教育関係者の皆様のべ約550名をお迎えし、「第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会」を開催できましたことに、心よりお礼と感謝を申し上げます。

釧路管内での全道大会は、平成16年度に開催された「第53回全道へき地複式教育研究大会」から、13年ぶりの開催でありました。前回大会の際は、釧路管内には40校以上のへき地複式校があり、その中から８町村10授業会場で大会が行われましたが、今回は管内全体で21校のへき地複式校の中から、７町村８授業会場で大会が行われました。前回大会に比べて、各町村でサポートに回れる協力校が激減し、授業会場校の負担は大きくなりましたが、それぞれの学校・町村・そして釧路管内が積み重ねてきた、「へき地複式教育の研究成果」を、全道および道外に向けて発信できたのではないかと自負しております。

我々は、『タンチョウはばたく釧路の大地から　未来を切り拓く子らに　豊かな心と確かな学力を』を大会スローガンとして、釧路管内各町村の教育研究所と連携しながら、実行委員会を組織し、管内あげて大会成功に向け、取組を進めて参りました。また、北海道へき地・複式教育研究連盟が推進する、第９次長期５か年研究推進計画の４年次～「いつでも」「どこでも」「だれでも」が実践できるよう、成果を典型化・定型化する「実践研究整理期」～として、過去３年間の研究実践の成果と課題を踏まえ、それらの「実践研究」を創造・発展・累積し、その実践の中から典型化・定型化を図り、整理・集約する研究大会となるよう心がけました。基調報告や公開授業をご覧頂き、その意をお酌み取りいただけたのではないかと考えております。

最後になりましたが、現地実行委員会や授業会場校の先生方、本研究大会の実施に向けご支援いただいた全国へき地教育研究連盟、北海道教育委員会、釧路管内町村教育委員会連絡協議会、釧路管内各町村教育委員会、釧路教育研究所、釧路校長会、釧路小中学校教頭会、北海道教育大学、各分科会助言者の皆様、全道各地や道外の教育関係者の皆様へ感謝とお礼を申し上げ、ご挨拶とさせて頂きます。

# 基　調　報　告

第66回全道へき地複式教育研究大会釧路大会

研究部長　佐藤　健二

**【釧路の歩み】**

昭和20年に釧路管内で単級複式教育研究協議会が発足し，昭和51年には管内複式教育組織の再編が図られ，「釧路へき地複式教育研究会」となる。同年に，第25回全道へき地複式教育研究大会釧路大会を開催。平成２年には第39回大会，平成16年に第53回大会を開催し，平成20年度には，名称を現在の「釧路へき地複式教育研究連盟（以下釧へき連）」と改称し，釧路管内のへき地・複式教育の充実・発展に役割を果たしてきた。

**【現状とこれまでの研究】**

釧路管内には，小学校が59校あり，そのうち21校が複式校である。釧路市27校を除くと，複式校の割合は約60％で，まさに釧路の複式教育を充実させることが管内教育の充実・発展につながるものと考え，釧へき連では，数々の研修会や情報発信などを行ってきている。しかし近年の急激な複式校の閉校に伴い，複式授業の経験者の減少等，課題が生じている。解決策として，研究大会やゼミナール大会を隔年で実施し，各授業会場の「授業研究」「研究発表」を行い管内規模での教育の充実・発展に努めてきた。さらには，釧路教育研究所と連携し，「初めての複式授業」講座を開催している。釧へき連の活動方針は，４点である。

１，道へき・複連の研究推進計画を踏まえる。
２，これまでの第１次～第８次長計までの研究の成果と課題を発展的に継承する。
３，釧路のそれぞれの学校がおかれている地域・子供の実態と三特性（へき地・小規模・複式形態）を生かす。
４，釧路らしさがにじみでた研究を計画的に積み上げていくという願いや，時代が要請する今日的な課題の解決を目指す。

釧路の特色は，地域に根ざした学校・学級経営を土台にしながら，各学校の独自性を尊重して，多様な研究を集約し成果と課題を明らかにして発信していることである。各学校の研究主題は状況に応じて設定されるものであり，釧へき連として特定の分野，課題のみに重点を置くことはしていない。各学校の実態に応じて，研究・実践した成果を蓄積することで，第９次長計に資することを目指している。

**【研究主題】**

「主体的・創造的に学び，豊かな心でたくましくふるさとを切り拓く子供の育成」
～へき地・複式教育の特性を生かし，児童生徒一人一人に未来に『生きる力』をはぐくむ学校・学級経営と学習指導の充実をめざして～

**【大会スローガン】**

「タンチョウはばたく釧路の大地から　未来を切り拓く子らに　豊かな心と確かな学力を」

**【釧路大会の研究内容】**

ここ数年，釧路管内では，２分野８課題の研究内容に関してバランスよく取り組み、本年度，第1分野課題①「三特性を踏まえた学校経営計画」には，33％の学校が，課題②「地域素材・地域人材の活用」，課題③「地域に根ざした道徳教育」，課題④「近隣校や地域と連携した実践的な共同研究」については，共に22％の学校が研究内容としている。特に，近年，課題④に関する研究実践校が増加し，小規模校の柔軟な学校・学級経営を生かし，関係機関との連携の下で，校種間交流，教師の資質向上や授業改善が図られている。

釧路大会は，各学校が設定した研究主題による研究を大事にしながら，第９次長計との関連を図るとともに，プレ大会で明らかになった成果と課題の検証に取り組み，これまで築いてきた「オール釧路」で取り組む釧路ならではの複式教育のよさを生かし，そのよさを実感できる大会になるよう目指した。

**【むすびに】**

釧路大会開催にあたり，多大なるご支援・ご助言をいただきました北海道教育委員会をはじめ，北海道教育庁釧路教育局，北海道へき地・複式教育研究連盟，釧路管内町村教育委員会連絡協議会，各町村教育委員会，北海道教育大学，各教育関係団体等の皆様に心から感謝申し上げます。

# 分　散　会

**【分散会Ⅰ報告　学校・学級経営】**
■研究課題　地域に根ざした学校経営の創造と推進
～小中連携教育の推進を通じて～
提言者　石狩市立浜益小学校　校長　簑島　裕二

**■提言概要**

石狩市立浜益小学校では、地域にあった高校閉校後、中学校卒業と同時に多くの子が地域を離れる現状があることから、地域の教育課題である「どこへ行っても通用する学力とふるさとを愛する心」を育むために、小中連携教育を強力に進め、小中9年間を見通した教育を充実させている。

本校は、小中連携教育を学校経営の重点に位置づけ、その目的・方針等を明確に打ち出した。昨年度、ミドルリーダーを中心とした連携推進委員会を組織し活動に取り組み、連携の意識化を図り、今年度は、両校に共通した子供像や指導のよりどころが必要なことから、小・中のスタンダードづくりや小中合同運動会の平成31年度開催に向けた協議が始められた。小中連携の推進によって、学校経営上、成果を期待したのは、教育内容の変更・縮小を解消する等の教育課程の改善、小学校の学習指導技術の充実による学力向上、教職員の経営参画意識の醸成、小中9年間を見通した教育の充実などである。今後は、子供たちの実態をより正確に把握し、小中連携教育の重要性を考慮した教育課程の編成を進める必要があり、そのためにもカリキュラム・マネジメントの確立を積極的に推進し、両校の教育内容の質の向上を図ることが大切である等、提言された。

**■研究協議**

「地域の教育課題をふまえた校種間連携の在り方」を討議の柱に、グループで研究協議を行い、次のことが発表された。①体力向上に向けて、中学生との活動を取り入れる等動機づけの工夫②CSの導入を視野にした小中連携：小中合同学校評議員会から学校運営協議会への繋がり③小中それぞれの実態を調査し、理解した上での連携の取組④HP・参観日・学校便りでPRし、地域・保護者に理解を得ることで、スムーズな小中連携の進行⑤学力向上等テーマを焦点化し、課題を教職員間で共有化を図ることからの開始⑥地域を取り込むために、地域への活動の可視化⑦将来的には、町村単位での連携からより広域的に進めていくという視点⑧乗り入れ授業を行う際の教員の保持免許の課題などがある。

助言者から、浜益小では、小中連携を進める上で明確な方針・ミドルリーダーの活用・体制づくり・発信力等リーダーシップとボトムアップの工夫がなされている。今後、小中連携（一貫）教育は、さらにニーズが高まることから、目的の明確化と資質・能力の育成内容の明確化が重要である。目的の明確化には、小中連携のグランドデザインを創り上げ、つながるメリットを共有する必要があり、その際、校長のリーダーシップにより、ベクトルを示すことが大切である。育てたい資質・能力を明確化するためには、小中合同研修会の実施が考えられ、その合同研修会では、義務教育終了時の子供の姿を共有し、協働で9年間を見通した教育課程の編成を進めることもできるなどの多くの助言をいただいた。

**【分散会Ⅱ報告　学習指導①】**
■研究課題　自ら考え、生き生きと取り組む子の育成
～ 基礎基本の確かな定着をめざして ～
提言者　根室市立花咲港小学校　教諭　山田　正和

**■提言概要**

根室市立花咲港小学校では、自校の4つの課題、「児童の実態に合わせた授業改善」「学級編成に合わせた授業改善」「大規模校への進学に合わせた授業改善」「複式指導の経験が浅い教師のための研修システム」を推進するため、研究主題を「自ら考え、生き生きと取り組む子の育成」と設定し、個に応じた基礎基本の確かな定着を目指した授業改善を進めている。そこで、目指す授業を「目標は変わらないが、個に応じて手立てが変わる授業」とし、「読み」「書き」「計算」の学習技能向上を通して、自ら主体的に学習を進められる児童を育成するために、個に応じた指導を徹底して行っている。また、直接指導時を「児童が自学自習に必要な学習技能を習得させる場」、間接指導時を「直接指導で習得させた学習技能を活用させる場」、家庭学習を「間接指導で活用させた学習技能を応用させる場」と位置づけて、基礎基本の確かな定着を目指した指導につなげている。更には、各種学力調査結果を分析し、常に児童の実態を見直して個に応じた手立ての改善をする取組は、「カリキュラム・マネジメント」の中核をなすものとなっている。これまでの研究を通して積み上げられたケースごとの資料は、「児童の変容前の姿」「変容後の姿」「有効だった指導」としてまとめられ、個に応じた指導の充実につなげている。

研究の成果としては、「書く」学習技能が向上したことにより、自らの考えを説明できるようになったこと、授業に集中できなかった児童が、生き生きと学習に取り組めるようになったこと、個の発達段階に応じた短期的な視点での手立てが充実したなどの点があげられる。また、課題は、担任が変わっても、児童が変わっても個に応じた指導方法を継続できる手立ての共有化、手立てや指導方法を適切に切り替えていく中長期的な対応方法、学習規律の統一、リーダー学習やガイド学習への挑戦があげられた。

**■研究協議**

「読み・書き・計算などの基礎基本の定着を目指した授業の工夫」を討議の柱に、グループ研究協議を行った。基礎基本を定着させるためには、リーダー学習やガイド学習を活用した間接指導時のシステム作りが有効であること、学習規律の統一やノート指導と連動した板書を行うこと、直接指導におけるゴールをより明確にし具体化すること、間接指導時を主体的に学習に取り組む有効な時間と捉えて工夫するなどの重要性が確認された。

助言者からは、児童の自主性を養うために学校全体で課題やその解決に向けた手立ての共有化を図ること、目指す子供像をより具体化すること、直接指導・間接指導の利点を学校全体で明確に捉え、効果的につなげること、自学的な学習を進められるよう指示の明確化や指導内容の精選を図ることなどの助言をいただいた。

**【分散会Ⅲ報告　学習指導②】**
■研究課題　自ら学び・考え　互いに高め合う子供の育成
～　考えを積極的に交流し、学び合う授業を目指して　～
提言者　遠軽町立瀬戸瀬小学校　教諭　髙橋　寿子

**■提言概要**

遠軽町立瀬戸瀬小学校では、目指す子供像を「①課題に対して解決しようとする意欲をもつことができる子②既習事項を活用して、自分の力で解決することができる子③自分の考えを自分なりの方法で表現することができる子④考えをわかりやすく伝え、よく聞くことで、考え方を広げたり深めたりすることができる子」として、研究主題を「自ら学び・考え　互いに高め合う子供の育成」と設定、算数科を中心教材として、今年度は、互いに考えをわかりやすく伝え合い、よく聴き合い、さらに考えるという「学び合い」を通して、考えを整理したり、深めたりすることに重点をおいて進めてきた。

研究重点に関わる成果は、自分の考えを相手に伝え、比べようとする姿勢で学習することができた。考えを伝え合うことで、課題解決する際、自分の考え方の他に違う考え方をすることもできるということを認識できると同時に、より良い方法はどれかを考えることができた。互いの考えを比べ合い、不足部分を補い合いながら学習を深めることができたなどがあげられた。課題は、自分の考えを伝えようとする姿勢は見られるものの、筋道を立てて説明したり、言葉遣いの部分では不十分であり、ひとつの言葉の意味にこだわり、考えを交流する際に論点がずれてしまい課題解決に結びつかないことがあったなどがあげられた。

**■研究協議**

「考えを分かりやすく伝え合い、学び合う授業の工夫」を討議の柱に、グループ研究協議を行った。考えをわかりやすく伝え合い、学び合う授業にするためには、①同時間接指導は有効な手立てであり、そのために学習リーダーを育成することが必要となる。②つなぐためには発言の語尾に「誰かつないで下さい」ということで、意識が変わり、全員で解決が図れる。③子供のモデルになるように教師にとっても分かりやすく（見とりやすい）指導が必要となる。④発達段階にあわせた交流の方法を進めるマニュアルを有効に用いて、それを発展させる。⑤間接指導時の交流については、子供に学びの力をつけるために教師が強い思いを持って行うことが大切などの重要性が確認された。

助言者からは、提言内容は非常に丁寧に取り組んでいて、少人数のよさが感じられること。優れた点として、目的意識を明確に持たせた主体的な学習指導、効果的な支援や交流の在り方について、学びを深めるためにしっかり具体策をもって進められていることが話された。今後、「主体的・対話的で深い学び」の視点に関わって、指導要領で示された3つの視点に即して授業改善を図ってほしいなどの助言をいただいた。

# 各分科会報告

〈第１分科会：釧路町立昆布森小学校〉

１　研究主題

『学び方を身につけ、
生き生きと活動する子どもの育成』
～自ら考え、交流し、
互いに高め合う複式授業を通して～

２　研究仮説と成果

**仮　説**　**「学習の過程を明確にした授業展開を繰り返し、自分の考えを交流したり発表するなど、言語活動を工夫していけば、見通しを持って、自ら学び、自分の考えをさらに高めようとする子どもが育つであろう。」**

本校では研究仮説を具現化する手立てとして、２つの視点からアプローチを試みている。

１つ目は、「学び方を身につけさせる」ための授業づくりの取組である。学習内容の焦点化を図るための課題設定の工夫や学習過程の工夫、そして、教師の関わり方の精選化を図ることで、日々の授業の中で子ども自身が学び方を身につけられるよう取り組んでいる。

２つ目は、「生き生きと活動する」ための交流場面の工夫である。一人学習で深めた自分の考えをみんなと交流することで、学びを深め広げ、学び合うことのよさを実感することができると考える。

以上の２つの視点で実践を進めていく中で、子どもたちは見通しを持って学習に臨むことができるようになり、課題に対する思考も焦点化されることで、学習意欲の高まりを感じられるようになった。また、交流での意見のつなぎ方を発達段階に合わせて指導することで、意見の出し合いのみならず、意見の比較や、立場の違いにも目が向くようになってきた。更にＩＣＴの活用により、ノートを使った日常的な交流が可能となり、そのことでノートのまとめ方にも相手意識が見られるようになった。

３　今後の課題

子ども自身が更に学びを深めるためには、一層の学習過程の工夫・改善を図るとともに、交流の目的を子どもたちにつかませることで、考えを深めたり、広げたり、まとめにつなげていくことについて、更に研鑽を深める必要がある。

〈第２分科会：厚岸町立太田小学校〉

１　研究主題

『主体的に学び深く考える子の育成』
～複式学級での国語科・文学教材の効果的な指導を通して～

２　研究内容と成果

**研究内容１**　**主体的に学ぶ子どもを育てる指導計画の工夫**

研究内容１－１　思考を深めるための見方・考え方･表し方の明確化　研究内容1－2　教材の特質と育てたい力に即した言語活動の位置付け　研究内容1－3　主体的な学びを引き出す単元構成

**研究内容２**　**学びを深める学習形態の工夫**

研究内容２－１　学年（発達段階）に応じた、学び方の系統性の確立　研究内容２－２　児童の思考の流れに沿って学びを高める場の工夫　研究内容２－３　学びを高めるための教師の働きかけ

上記の２つの研究内容を大きな柱とし、それぞれ３つの手立てを考え検証にあたった。思考を深めるために必要な見方・考え方・表し方を整理し、指導場面でどのような力を育てていくかねらいを明確にした指導の積み上げ、教材の特質を適切に把握し単元のねらいを踏まえた言語活動の設定、学びのゴールに向けた各段階での言語活動の意図を明確にした指導計画の位置付けの３つと間接指導時の子どもが見通しを持って学びを深めるための学年（発達段階）に応じた学びの系統性の確立、自力解決から交流話し合いへの子どもの思考の流れをスムーズに作ること、発問や板書の意図を明確にした様々な教師の働きかけにより本校の研究主題に迫ることができ、授業後の研究協議や授業アンケートの結果からも満足のいく一定の成果を得ることができた。

３　今後の課題

新しい学習指導要領で求められている主体的で対話的で深い学びへ向けた研究推進をさらに進め、へき地・複式の特性を生かした太田小学校でできる太田小学校でしかできない教育を創造していきたいと考える。

〈第３分科会：浜中町立散布小中学校〉

１　研究主題

『自分の考えをもち、進んで学び合う授業の構築』

２　研究仮説と研究の成果

小中併置校での実践ということもあり、学校全体で９年間の児童・生徒の成長を見通して研究を進めることができた。昨年度より研究仮説を「小学校：教師が学び合いの場を工夫することにより、児童は、主体的に学び、基礎的・基本的な力を身につけることができるであろう」「中学校：教師が学び合いの場を工夫することにより、生徒は主体的に学び、コミュニケーション能力、思考力が高まるであろう」と設定し、『学び合い』をキーワードに小・中が連携し日常実践レベルの授業作りを行ってきた。今年度は特に「授業で『内容目標』と『態度目標』を掲示し、指導に役立てる」ことと「Ｑ－分類簡便法」による動因効果の測定を小中共通で実施し、児童・生徒の変容についての見取りを進める研修も深めることができた。

公開授業では、小・中ともに自分の考えをホワイトボードやワークシート、拡大投影機などを活用し友達と意見を交流し合ったり、教え合ったりする様子も見られた。進んで課題を解決しようとする姿から、日常の授業の成果が現れていた。

研究協議は、ワークショップ形式で実施され、各グループから、「子ども同士で学び合っている姿が見られた」「発表のスタイルが定着していた」等の意見が多く出された。助言者からは、学校の特色を生かし、小中９年間の指導がなされている。今後も小学校と中学校の９年間をしっかりとつなげていく学習指導過程の充実をめざしてほしい」との講評をいただいた。

３　今後の課題

「学び合い」「グループ活動」「ペア学習」は、目的化してしまう傾向がある。どのような場面で話し合い活動を取り入れていくのかねらいを持つことが大切。グループか、ペアか、どういう人員配置にするかまで踏まえて指導計画の中に組み込むことで、より思考力、表現力を高めていけるよう研修を深めていきたい。

〈第４分科会：標茶町立沼幌小学校〉

１　研究主題

『自ら考え、粘り強く取り組む子どもの育成』

～自力解決のための態度や能力を高める

個に応じた指導のあり方～

２　研究仮説と成果

仮　説　**「複式少人数の特性を生かし、個に応じた指導の工夫のあり方を図り、児童一人一人の学びに対する態度・意欲を向上させることにより、主体的に学習を進めていくための能力や態度を育成することが、できるであろう。」**

上記の仮説検証のため「個に応じた適切な指導のあり方」「自力解決の深化・ふり返りの場の工夫のあり方」「学習規律のあり方」の３つの研究内容とし、４年計画の３年次として今年度の研究を推進してきた。

一つ目の個に応じた指導については、見通しを持たせる工夫により自己解決に向かう子どもの姿が見られた。二つ目の自力解決の交流の場においては説明を行うときに根拠を明確にした説明をすることで、理解を深めることにつながった。また、ふり返りの場を設けることで、次の時間の見通しを持つことにつながった。三つ目では、ノートを見開きで使うことで、課題とまとめがひと目でわかるように指導してきた。

研究協議においても、参加者からは、課題に対する見通しを立てさせるで、迷うことなく解決に向かうことができていることや課題解決への意欲作りが自力解決の深化につながるなどの声があげられた。また、アンケートでは、自力解決に向けての手立てが子どもたちにしっかりと訓練されていたなどの意見が多数寄せられた。

３　今後の課題

来年度は４年次のまとめの年次であるので、説明の仕方をまとめることや発表の練習を行うことで新学習指導要領で求められている主体的・対話的な学習が深い学びになるように進めてきた。今後、理由を明らかにして考える力をつける工夫と根拠を明確に説明できるように具体物や半具体物を用意する等の工夫が必要である。

〈第５分科会：標茶町立塘路小中学校〉

１　研究主題

『自らの学びを拓き、
生き生きと学び通す子どもの育成』
～子どもが予想を立て、
解決の方法を探る展開の工夫～

２　研究仮説と成果

**仮　説１**　**「導入において、課題設定の場を工夫することで、子どもが意欲・見通しをもって自力解決ができるであろう。」**

**仮　説２**　**「展開部分において、自力解決の支援を工夫することで、最後まで意欲をもって解決に向かうことができるであろう。」**

**仮　説３**　**「課題解決から説明の場面において、ノート指導や説明の仕方を工夫することで、筋道を立ててわかりやすく伝えることができるであろう。」**

本校では、３年計画の３年次目ということで、「課題設定・自力解決・発表や説明」の３つの場面で研究仮説を設定し研究を進めるとともに、仮説以外の取組として、「小学校の複式授業での同時導入の試み」や「小中学校の連携」についても取り組んできた。これらの取組により、児童生徒が主体的に学び通す学習活動が見られるようになり、相手を意識した発表ができるようになってきた。

当日は中学校を含めた４本の授業公開の後に研究内容に関わる質疑応答、３つの仮説検証を５つのグループに分かれてワークショップを行い、「生活に生かせる技能であることを伝えたり、生活に関わる問題設定の工夫などで必要感を持たせる課題設定」「説明や発表をさせるために必要なスキルの指導の有効性」などが成果として挙げられた。

３　今後の課題

今年度が校内研究のまとめの年次であるが、新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、本校の研究としている児童生徒から課題やまとめを引き出す活動や、小中連携の取組などをさらに推し進めていく必要がある。

〈第６分科会：弟子屈町へき地３校集合学習〉

１　研究主題

『自ら学び、豊かな心でたくましく
郷土を切り拓く子どもの育成』
～かかわり合いながら、学ぶ楽しさを味わえる
「集合学習」のあり方を求めて～

２　研究仮説と成果

**仮　説１**　**「子どもたちによる学び合いが生まれる『全習』『分習』を工夫することで、学ぶ楽しさや成就感を味わわせることができるであろう。」**

**仮　説２**　**「『全習』『分習』で全教師が協力して指導することで、子ども一人一人が自分らしさを発揮し、表現することができるであろう。」**

本町では、上記仮説を検証するために、「子どもによる学び合いが生まれる『全習』『分習』の工夫」「一人一人のよさを伸長する協力教授の工夫」の２つを視点に研究を進めてきた。

当日は、低・中・高３本の集合学習を公開した。「全習と分習で教師がねらいを明確にし、児童が目的意識をもつことで、意欲の高まりや変容が見られた」「全習で課題を見つけて分習で克服し、再び全習で実践することで、学習が深まった」、ねらいの明確化と共有により「それぞれの授業者が、個に対して、グループに対してのかかわりが適切になされていた」という成果が挙げられた。

３　今後の課題

教師の役割について、どの子にも指示がわかりやすくするための「Ｔ１の指示を板書する先生」「時間の目安を伝える先生」「演奏をビデオに撮り振り返る準備をする先生」「学習のモデルを示す先生」「うまくいかないことを実演する先生」など効果が高まる教師の役割について、さらに検討が必要である。

また、指導や目標などは学年別が基本であるため、学年の段階に応じて、さらには少人数のよさを生かして一人一人に応じたねらいや支援を追求できる学習指導案についても検討する必要がある。

〈第７分科会：鶴居村立下幌呂小学校〉

１　研究主題

『ともに学び合い、
　一人ひとりが学びを実感する子どもの育成』
～学びの連続性を生かした授業づくりを通して～

２　研究仮説と成果

仮　説１　（学びの実感・学びの連続性）

**「学習したことをふり返り次の課題解決に生かす場面を設定することで，子どもは学びを実感するであろう。」**

仮　説２　（学び合い・協働学習）

**「子どもが課題を追求する場面で協働的な学習を行う場を設定することにより，子どもは根拠を持って自分の考えを表現することができるようになるであろう。」**

３年計画の２年次目である今年度は「ふり返りの場の設定と内容・方法の工夫」「学習リーダーを中心として積極的に交流を行えるような手立ての工夫」に重点を置いて授業づくりを行ってきた。この積み重ねにより、間接指導時における子ども相互の学び合いや、学習の成果として実感を伴った理解につながる振り返りが見られるようになっている。

大会当日は、中学年・高学年の２本の授業を公開した。研究協議は、協力校である幌呂小学校の先生が運営を行い、小グループ毎に仮説についての課題と改善の方策について意見を交わした。その中で、振り返りが、本時の感想に終始しないよう課題の設定や観点を明確にした授業設計の必要性、また、協働的な学習を進めるための課題理解の重要性などについて意見が出された。子どもの学びに向かう姿勢や自己表現の能力、協力して学ぼうとする姿についての成長が授業で表出していた。

３　今後の課題

子どもが、自力解決後に交流した事柄を相互にまとめられるように、課題を明確にした授業づくりを継続していく必要がある。また、教科リーダーが中心となった話し合いがスムーズに展開できるよう、リーダーの役割と互いの関わり方について、学年に応じた指導を継続していく必要がある。

＜第８分科会：白糠町立茶路小中学校＞

１　研究主題

『かかわりあいながら学びを深め、
　自分の考えを表現できる子どもの育成』
～９年間の系統性を意識した指導を通して～

２　研究仮説・視点と成果

仮　説１　**「授業において、交流を工夫することにより、自分の考えをより豊かに表現できる子どもが育つだろう。」**

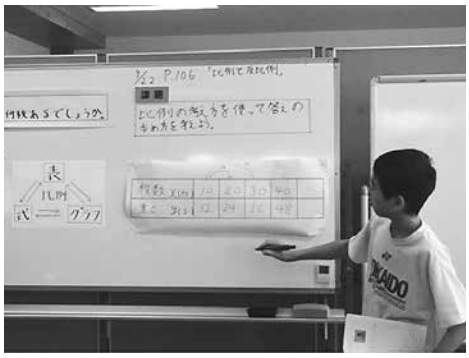
・視点１　表現・交流場面の時間の確保
・視点２　相手の理解を意識した伝え方
・視点３　子どもの考えをひろげ、深まる交流

仮　説２　**「子どもにつけたい力を明確にし、発達段階に応じた指導を積み重ねることで、子どもの学びが深まるだろう。」**

・視点１　学習の土台となる基盤づくり
・視点２　つけたい力の明確化

本校では、「より豊かに表現する」「学びを深める」の２点において、２つの仮説と５つの視点から研究を推進してきた。また、小中併置校であり平成30年度から小中一貫教育がスタートすることから９年間の学びの構築も視野に研究を進めてきた。学習規律や学習過程、板書を統一したことで、子どもが安心して学ぶ学習環境が保障できた。交流を支えるスキルの系統表などから、全校的に教育活動全体で意識して指導を進めることができてきている。

当日は小学校の２本の授業公開の後、研究内容に関わる質疑応答、研究協議を実施した。研究仮説１の３つの視点を柱に５つのグループでのワークショップを行った。「『使いたい言葉』の掲示が子どもの学びに役立っている」「教科書のキャラクターの活用や教師との話し合い、ＡＴや支援の先生などさまざまなかかわりあいがあることで、いろいろな考えに触れ深めあうことができている」などが成果としてあげられた。



３　今後の課題

今年度が本研究のまとめの年次である。必要感のある課題設定の工夫や「交流を支えるスキル系統表」の小中９年間での有効な活用などについて推進していく。

開会式（櫻田会長祝辞）

基調報告（佐藤研究部長）

分散会（学校・学級経営）

分散会（学習指導①）

分散会（学習指導②）

閉会式（感謝状贈呈）

分科会（授業公開）

分科会（研究協議）

# 次期開催地から　第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会

## 後志での学び合いに、皆様のご参加をお待ちしております

第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会実行委員長　山　本　康　博

第９次長期５か年研究推進計画の４年次、実践研究整理期１年目に位置づけられた釧路大会が、全道各地から多くの参加者を迎え、成功裏に終えられましたことに、心より敬意を表します。大会実行委員の皆様、そして各学校教職員の皆様の、用意周到なご準備と温かい心配りの丁寧な運営に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

さて、第67回全道へき地複式教育研究大会後志大会は、平成30年９月20日(木)に倶知安町にて全体会、21日(金)に後志管内８町村８会場において分科会を開催いたします。

第９次長期５か年研究推進計画の最終年次となるこの大会は、豊かな心を育てる研究の系統的・発展的実践と記録の累計を図るとともに、確かな学力を育てる学習指導方法の究明に努め、典型化・定型化を図ることが目途となります。「自然豊かな後志から　夢・希望に挑戦する子らへ　豊かな心と学び続ける力を！」を後志大会スローガンとして、「後志らしい教育を“そだてる”“つなぐ”“ひろげる”場に」をめざし、実践的な研究を推進するとともに、組織を挙げて企画・準備に努めているところであります。

マリーンブルーに輝く日本海と秀峰羊蹄山の裾野に広がる大地に育まれた、後志の明るく生き生きと活動する子どもらが皆様をお迎えします。

全道各地から皆様が後志の地に集い、北海道のへき地・複式教育の発展に向け、共に研究を深め合えることを楽しみに、実行委員会一同、心よりお待ちしております。

### ■後志大会スローガン

**自然豊かな後志から　夢・希望に挑戦する子らへ**
**豊かな心と学び続ける力を！**

### ■開催期日

平成30年９月20日（木）全体会・分散会　21日（金）分科会

| 分科会 | 会　場　校 | 研　究　主　題　～副主題～ | 分野・課題　教科等 |
|---|---|---|---|
| 1 | 寿都町立<br>潮路小学校 | 自ら進んで学び　ともに高め合う子どもの育成<br>～複式学級の特性を生かした算数科授業の構築～ | 学校学級３　学習６<br>算数科 |
| 2 | 蘭越町立<br>昆布小学校 | 主体的に学ぶ子どもの育成を目指して<br>～能動的な学びを実現する指導の工夫　算数科を通して～ | 学校学級1･2　学習6･7<br>算数科 |
| 3 | ニセコ町立<br>近藤小学校 | 自ら学び　伝え合い　考えを深める子どもの育成<br>～できる喜びを味わわせ、表現力を養う算数科指導の工夫～ | 学校学級１　学習6･7<br>算数科 |
| 4 | 真狩村立<br>御保内小学校 | 「表現力」を高める指導の在り方<br>～相手や目的を意識し、自信を持って「思い」や「考え」を伝える児童の育成～ | 学校学級２　学習6･7<br>国語科 |
| 5 | 喜茂別町立<br>鈴川小学校 | 基礎・基本を身に付け、自ら進んで学習する子の育成<br>～算数科における指導の工夫を通して～ | 学校学級１　学習6･7<br>算数科 |
| 6 | 倶知安町立<br>西小学校樺山分校 | 確かな学力を身につける授業のあり方<br>～複式授業のよさを生かし、基礎基本を大事にした算数科のあり方～ | 学校学級２　学習７<br>算数科 |
| 7 | 神恵内村立<br>神恵内小学校 | 一人ひとりが主体的に取り組み、関わり合いながら伸びていく子どもの育成<br>～算数科における問題解決的な学習を通して～ | 学校学級１　学習6･7<br>算数科 |
| 8 | 赤井川村立<br>都小学校 | 人との関わりを大切に、生き生きと学び合う子の育成<br>～コミュニケーション力を高める指導の工夫・算数科を通して～ | 学校学級２　学習6･7<br>算数科 |